恋と相撲と

――『本朝二十不孝』「無用の力自慢」の周辺――

永吉雅夫

（一）

西鶴『本朝二十不孝』巻五の三は「無用の力自慢」と題する一篇である。すべて二十人の親不孝者のうち、ここで取上げられるのは「歴々の町人」で「両替見世」を出して「世間にしれたる者」の息子「丸亀やの才兵衛」という人物。

丸亀屋の才兵衛の、「不孝」たるゆえんはなにか。作品は、才兵衛が「力ばかりを自慢して、昨今取出の男」として「高松の荒磯」という四股名を名乗り、「四十八手にほねを砕き、片輪になる事もいとはず、無用の達者を好」むありさまを描く。父親は、れっきとした町人の趣味道楽ならと、琴碁書画のほかに、茶の湯・鞠・楊弓・謡、あげくに四書の素読まで挙げて「分別らしき異見」をする。が、そんなまっとうな説教が耳に入るくらいなら苦労はないとばかりに母親が説いてきかせる言葉こそ、才兵衛の一途さが世間の目からは偏向となるようすをよく示すものはあるまい。

もまた、そなたも十九の春なれば、花見がてらの都にのぼり、金銀ためしはこんな為なれば、嶋原に行て、太夫を残らず見尽し、大坂の芝居子に出合、其若衆気にいらば、すぐに身請して、三津寺新屋敷とやらに、家でも買てとらせ、心やすき立より所にせられよ。この度、千両弐千両つかへばとて、跡の減内蔵でもなし。首尾は母にまかせよ。

花の都の、嶋原の太夫および歌舞伎若衆という男女二道の色遊び、金に糸目をつけぬ豪遊のすすめである。ふつう、そう願っても現実的に実現不可能か、それこそ親の許さぬところであろうが、この母親はそれを才兵衛にすすめるというか、唆しているのである。にもかかわらず、才兵衛の返事は「只世中に、相撲取より外に、何が遊興なし」だったから、聞耳を立てて、その話の内容のあまりに「うまい事」に舌なめずりしていた手代どもが

「若旦那のわる物ずき」と嘆くのも無理はない。

その後、才兵衛は女房は押し付けられたものの、「男ざかりに力落しては、口惜」というので一度も同じ部屋に寝ることもなく、「相撲より外に、楽みなし」、修行一途の生活を続け、「荒磯」の名前をきくだけで誰もがにげだすような「四国一番の取手」となった。

これだけなら風変わりな息子の、しかし精進の物語として、子孫を残さぬかもしれない点に問題があるだろうが、親も笑ってあきらめたかもしれない。が、増長慢の才兵衛はある「山里」の「夜宮相撲」に出て、無名の「在所」の「強力」に手もなく投げ飛ばされてしまう。「捨舟の荒磯に埋れしごと」き惨敗だったから、「骸骨くだけて」肢体不自由となった才兵衛は、思うにまかせぬ養生に少しの事にも苛立ちあたりちらすので、誰も世話をする者もいなくなり、「勿体なくも、親達に足をさすらせ、大小便とられ」るありさまで、「親のばちあたり」と名乗るほかなかった、というのである。

佐竹昭弘のみごとな解読によれば、「『本朝二十不孝』は『本朝孝子伝』今世部を経とし、「二十四孝」を緯として作られた転合書」で、「『本朝二十不孝』と「二十四孝」との比定は、間に『本朝孝子伝』今世部を介して行なわなければ、絶対に成功しない」として、次のように述べる。

「「無用の力自慢」は、新妻を寄せつけようともしなかった丸亀屋の才兵衛が、固辞して妻を娶らなかった『本朝孝子伝』今世部の「西六条院孝子」惣十郎と対応し、後者が母と弟と三人で病臥する祖父を看病している挿絵も、「勿体なくも、親達に足をさすらせ、大小便とられ」た才兵衛の情景と呼応している。」

そして、「「勿体なくも、親達に足をさすらせ、大小便とられ」の部分」は「みずから母親の便器を濯いだ「二十四孝」の「黄山谷」の逆用」になっているが、それ以上に「一篇の構想上、特に重視すべきは主人公の大力であり、「子路負米」の故事」であり、「「大力」「俵」→「相撲」「讃岐」、「二十四孝」の子路と「無用の力自慢」とは俳諧的に一本の道で直通している」のである、と(以上、佐竹昭弘『絵入本朝二十不孝』岩波書店)。

この解読に異議のあるわけでは勿論ない。しかし、「新婦をして祖父が廃人にして而して居所穢多きを視せしむることを欲せざれば」こそ妻を娶らなかった「西六条院村孝孫」に対して、同じように新妻を寄せつけようともしない才兵衛ではあるけれども、なぜその理由が

「相撲」であったのだろう。たしかに祖父に仕えるということに比べて「相撲」とは馬鹿馬鹿しい。しかし、「相撲」だけが馬鹿げているのではなく、馬鹿馬鹿しい理由になるものは、ほかにもたくさんあったはずだろうに。結婚しないこと＝色恋の排除と相撲とのあいだに、あるいは何か文学的連想とでも呼べる筋合いでも通っているのだろうか。

そこで、いささか飛躍するようだが、『伊勢物語』四十段を見てみよう。わたしには「無用の力自慢」とは対極にある、ほとんど一対のストーリーのように思われるのである。

（二）

『伊勢物語』四十段の全文を岩波新古典大系の本文に基づいて掲げる。

昔、若きおとこ、異しうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする親ありて、思ひもぞつくとて、この女をほかへをひやらむとす。さこそいへ、まだをいやらず。人の子なれば、まだ心いきおひなかりければ、とどむるいきおひなし。女も卑しければ、すまふ力なし。さる間に、思ひはいやまさりにまさる。にはかに親この女をおひうつ。おとこ、血の涙をながせども、とどむるよしなし。率て出でて去ぬ。おとこ、泣くなくよめる。

出でていなば誰か別の難からんありしにまさる今日は悲しも

とよみて絶え入りにけり。親あはてにけり。猶思ひてこそいひしか、いとかくしもあらじと思ふに、真実に絶え入りにければ、まどひて願たてけり。今日の入相許に絶え入りて、又の日の戌の時ばかりになんからうじていき出たりける。昔の若人は、さるすげる物思ひをなんしける。今の翁、まさにしなんや。

仲を割かれたらそのまま「絶え入」るほどの情熱的な「若きおとこ」の恋のスケッチであるが、裏を返せば、子の恋愛に、子を思うゆえの入らぬ手出しをして、あわや恋死にに子を失いそうになってあわてふためく「さかしらする親」の物語でもある。

この「さかしらする親」について、『拾穂抄』の注釈

は「女」の親を想定している。すなわち、業平が通っている相手の女の親が、娘が業平に惚れ込んでは大変だというので娘を余所へ連れて出ていった、と読むのである。なぜ「思ひもぞつく」ことが問題なのか。女を形容する「異しうはあらぬ」「卑しければ」について、「下すしうはあらぬ」「若きをいふ」としているので、身分違いの関係を想定しているわけではないとしたら、数々の艶聞で知られる業平との浮名から娘をまもろうとする親心なのだろうか。そこには恋の遍歴をかさねる業平の「恋」に対する女の親の不信があるというわけだ。「其女の親、我いひさだめぬ事なれば」と注釈するばかりである。ところが、〈女を追い出せば自分もこの世に生きてはいまいから、別れはなにほどのことでもないが、これまではまだ将来をたのむことができたのに、今は女に別れて自分も死ぬので、これまで以上に今日はかなしい〉という意味の歌を残して、「真実に」気絶してしまったのである。意想外の展開に女の親のあわてふためくさまを通して、業平の「すける物思ひ」の真実が強調されるということになる。もっとも、女の親としたことで「猶思ひてこそいひしか」の部分が、業平の思いを忖度するものか、「業平のためをおもひて」の措置を意味するのか、「両説所好にしたがはんか」と、解釈がぶれる結果となっている。

それに対して、たとえば本文自体には塗籠本による異同を含むが、解釈について現在のスタンダードを提供している藤井高尚『伊勢物語新釈』は、「さかしらする親」を「おとこ」の親とする。すなわち、親がかりの息子と家に召使う女性とのあいだの幼い身分違いの交情、したがって将来に見込みのない仲らいを「かくておかば、思ひつきて離れがたくやならんと、行末をあやふく思へ」ばこそ、男の親が女を無理に家から追い出し、ふたりを引き離した、と読むのである。「さかしら」の大人の分別からすればそんな恋でも、「むかしは人の情ふかかりしかば」、「心のあだあだし」く「ものをふかく思ひしまず」にいるのが「わかき人」というものであるにもかかわらず、この男は命がけであった、その「情のふかき」点をよしとする、というのが高尚の注釈の態度である。

いずれの解釈に立つにせよ、この男女には恋愛の情熱だけがあって、現実的にはなんとも非力である。あるいは現実の前での非力が恋愛の情熱をいっそう浮彫りにするという構図。なんと書いてあったか。「人の子なれば」「卑しければ」、ふたりともに「すまふ力」がないのであ

る。「すまふ」はもちろん、「まけじとあらそふ意にて、ここは、家を出でじとするちからのなきを」（『伊勢物語新釈』）意味している。親がかりの身ゆえ女を追い出そうとする親の意向を知りながらも男は為すすべなく、まして召し使われる女の身では追い出そうとする主人に抵抗できるはずもない。『拾穂抄』も、女も「いまだ若ければ、をひやるをいなとも恨ぬ也」としている。すなわち、ここにいるのは恋路を妨害する親に「すまふ力」がないばかりに気絶して、親をあわてさせてしまう息子である。そして、かの才兵衛とは、結婚をすすめる親に対して「相撲」に夢中になったばかりに気絶して、親をあわてさせた息子であった。

わたしはデキの悪い駄酒落を言っているつもりはない。この『伊勢物語』四十段の、それゆえに恋をくじかせた「すまふ力」を、実際に「相撲」に読みかえるくらいのことは、古典に対する近世的応接のなかでは児戯に類すると言ってもよいだろう。悪い駄酒落はわたしのせいではなく、それを基本的な発想とする仮名草子『仁勢物語』のものである。次に、それを見てみよう。

（三）

仮名草子『仁勢物語』は作者未詳、寛永末年頃の刊行とみられている。書名にすでに明らかなように、『伊勢物語』の逐段的なパロディーを本歌取りの狂歌のようにしておこなった作品である。その当該の章段を、『伊勢物語』四十段と読みくらべるために全文引用する。

をかし、若き男、芸にもならぬ相撲を取けり。嬉しがる親にて、よく取ると思ひて、此子を外にて取らせんとす。さこそいへ、未だ取らせず。独子なれば、甘やかしければ、取るに勢いなし。此子病み上りなりければ、相撲の力なし。さる間に、相手はいや勝りに勝る。俄に親此子を連れて行く。此子縮緬の手綱をして、轟足踏みし、出て取りぬ。此子なよなよと詠める。

出て取らば誰か我には勝たざらんありし力も今日は悲しも

と詠みて投げられにけり。親慌てにけり。よく取ると思ひてこそ取らせしか。いとかくも投げら

れじと思ふに、真実に絶へ入にければ、方屋にて願立てけり。今日の入相ばかりに絶へ入て、又の日の戌の時ばかりになん、養生して生き出たりけり。昔の阿呆は、さる相撲をなん取りける。今の各まさに仕なんや。

一読明らかなように、地口いわば通韻異義とでもよぶべき方法によって、意味がずらされるところに物語りは成り立っている。すなわち『伊勢物語』の「異しうはあらぬ女」が「芸にもならぬ相撲」に置き換えられて、恋の側面が消された結果、相撲好きの息子と、一人っ子ゆえ「甘やかし」、欲目に買いかぶる「嬉しがる親」との、「阿呆」らしい「相撲」をめぐるストーリーへと換骨奪胎された。いま、「恋の側面」と書いたが、『伊勢物語』ではそれが全部で、しかも「すまふ力」がない故に恋が頓挫した物語を、そのない「すまふ力」を中心に据えて物語を再編成したことになる。色恋の排除が、「相撲」を前景化したのである。

そして、「無用の力自慢」はこの『伊勢物語』と逆になっている。同じ相撲好きの息子に対して、「独りもひとりからと、かなしく、今は教訓の言葉もつきける」親と、「独子なれば、甘やかし」「嬉しがる親」と、というように。それはもちろん、親が子に「さかしら」する物語と、子の親に対する不孝の物語との対照に連続している。「今は教訓の言葉もつきける」親を描くのに、西鶴「無用の力自慢」が、その排除が結果として前景化させた「相撲」をもとどおり後景へと沈めるべく、色恋の唆しをあてた、というのは、いかにも系譜的に正当なことだったのである。

（二〇〇二年八月）